

とこなめ陶の森資料館 企画展

江戸時代の 常滑焼

— 陶業と陶芸の広がり —



とこなめ陶の森 資料館

ごあいさつ

江戸時代につくられていた常滑焼は、主に壺つぼや甕かめ、鉢などがあります。特に壺や甕が多く生産され、東海地方から関東地方にかけて流通していました。これらの常滑焼は水や油、穀物などをいれる貯蔵ちよぞう、衣類を染める藍染あいぞめやお酒の醸造じょうぞうのための道具として人々の生活を支えていました。

1700年代後半になると、壺や甕などの暮らしを支えるやきもののほかに、水指みずさしや風炉ふうろ、花器といった茶の湯の道具しやふつく、煮沸具や急須などの煎茶器せんちゃき、酒器しゆきなどの雅なやきものがつくられるようになります。

本企画展では、中世の頃から受け継いできた陶業的なやきものと、陶芸的なやきものの生産が加わった江戸時代の常滑焼を紹介します。

(とこなめ陶の森 石津琳那)



1. 灰釉菊孔付焼酎瓶

時代：江戸時代後期 作者：初代伊奈長三
高さ：58cm 口径：27cm

本作は焼酎しょうちゆうなどの液体を貯蔵するための道具です。この焼酎瓶には約2.7斗（約49ℓ）の液体を貯蔵することができます。

表面には布類を用いて灰釉が塗られており、その上にも自然釉がかかっています。釉薬が厚く溶けていることから、焼成時によく焼ける火前に置かれていたと考えられます。胴部の下部には、壺類の口縁部の破片が附着し、重ね焼きの痕跡が見受けられます。また、菊の花弁きく かべんをあしらった孔が配されています。このような装飾の施された焼酎瓶は非常に珍しいです。作者の「長三郎」の銘がへら描きによって刻文されています。

2. 土樋（土管）

時代：江戸時代後期 作者：不明
高さ：41.5cm 口径：13cm

土樋どひはため池から田んぼに水を引く導水や水はけをよくするための暗きよに使われています。江戸時代は、土管のことを土樋やイタチクグリ、水門などと呼んでいました。

当時の土樋は素焼のやきもので、紐ひもづくりによって一つ一つ手作業でつくられています。接続部にあたる口の部分が受け口状になっています。そのため、接続部の隙間すきまから泥が入るのを防ぐために、土管の内部に棕櫚しゆるや粗朶そだつを詰めて使用されていました。



3. 蓋付自然釉剣先文壺

時代：江戸時代後期 作者：不明
高さ：33.8cm 口径：20.4cm

本作は頸部に剣先の文様が連続的に押印されており、口縁部から胴部にかけて暗黄灰色の自然釉がたっぷりかかっています。また、口縁部内面に蓋を置けるように受け口になっており、付属のつまみのある蓋が乗るように設計されています。江戸時代に本作のような装飾が施されていて、かつ、蓋付きの壺が常滑でつくられるのは珍しく、醤油や油などの貴重なものを貯蔵するための壺と考えられています。



4. 自然釉舟形片口鉢

時代：江戸時代末期 作者：不明
高さ：6.3cm 口径：21.5cm

長楕円形で底部内面の中央に長軸方向に深い溝があるものは一般的に薬研として使われています。薬研とは漢方などの薬種を細かく砕くための道具です。本作にも同様の特徴が確認されましたが、溝の形状がゆるやかで、薬研として活用するには不向きな形状になっています。紐づくりによってつくられており、底部外面にはヘラで「北條村 源蔵」と彫られています。この名前は作者か使用者のものではないかと考えられます。



5. 陶製墓標

時代：江戸時代末期 作者：不明
高さ：42cm 幅：24cm 奥行：15cm

本作は江戸時代につくられた櫛形の墓標です。焼成があまり、素焼の状態です。墓標には上部に「𠄎」（「胎蔵界大日如来」を意味する「ア」）の梵字と下部に二段に分けて12名の名前が彫られています。また、側面には建立された時期と思われる文政九年（1826年）と裏面には建立者の名前も刻まれています。このことからこの墓標がお墓の改葬の際につくられたことがわかります。常滑ではやきものでつくられた墓標がたくさんありました。



6. 蝦蟇仙人像

時代：江戸時代後期 作者：上村白鷗
高さ：20.5cm 幅：18cm 奥行：15.6cm

蝦蟇仙人とは中国の妖怪である青蛙神蝦蟇を従え、妖術を使う仙人です。作者の巧みな技により、着物の質感や足の爪の細部まで表現されています。内部は空洞になっており、内部を確認すると紐づくりによって胴部と頭部を別々に成形し、最後に結合する形でつくられていることがわかります。仙人の表情豊かな顔や片膝を立てて座るデザインが魅力的な作品です。作者である上村白鷗は常滑の名工として知られています。



7. 不識水指 銘「抱甕」

時代：江戸時代後期 作者：久田耕甫
高さ：17cm 口径：18.5cm

水指は茶の場で使う水を貯える道具です。本作は焼成時に窯の中でも高温となる場所に窯詰めされたため、内部、外部ともに趣のある色合いとなっています。肩部には三葉柏の押印が三か所施され、底部には作者である久田耕甫の花押がヘラ描きされています。蓋は楽家の九代目、了入によってつくられた赤楽が使われています。

8. 自然釉銘刻舟徳利 一對

時代：江戸時代後期 作者：不明
高さ：27.5cm 口径：5.5cm

舟徳利は常滑でつくられた酒器の中でも人気があります。底部に幅のある形状を有しており、舟上で使用しても倒れにくいことからその愛称で呼ばれています。自然釉がかかった胴部には、「高岡村（現在の阿久比町）」と「大衾屋 吉左衛門」とヘラで刻文が施されています。このような刻文は祝いの席の主役の名前であることが多く、冠婚葬祭などでお酒をふるまうために使用された徳利ではないかといわれています。

とこなめ陶の森 資料館

企画展 江戸時代の常滑焼 2023年 3月18日（土） - 6月25日（日）